平成29年月日

W28-0225C　佐藤海地

地域通貨を知ろう　西部忠著　岩波書店　2003年４月15日第２版

第一章　お金ってなんだろう

1、そもそも「お金」とは？

　お金とは相異なるさまざまなモノやサービスを一様に経済的価値として数量的に評価し、それらを手に入れる手段として利用する為のものだと言える。

　お金の働きとして①「価値尺度」－円やドルのような度量標準により商品の価値の単位を定める。②「購買手段」－あらゆる商品を買うことができる。③「交換手段」－あらゆる商品の交換を媒介する。④「決済手段」－お金の貸し借りにより生じる債権や債務を精算する。⑤「価値保蔵手段」－価値を保存したり貯蓄したりして、将来へ持ち越す。がある。

　国家通貨はこれらすべての機能が必ずセットになっているので「全目的貨幣」と呼ばれる。

　近代以前のお金として、羽、たばこ、貝殻、布、ラム酒、棒鉄、奴隷、麦・米、紙切れなどが貨幣の材料として利用されてきた。経済人類学が対象とする「子安貝」や「石貨」などの原始貨幣は共同体内部でのみ使用されるお金「内部貨幣」。こうしたお金は貨幣の機能のいずれかを利用目的としているため「特定目的貨幣」とも呼ばれる。その中には、「シンボル機能」を持つものがあった。一方で、共同体の外部では「外部貨幣」として使われていた。

　お金が金や銀という貴金属に代表されるのは、それらが特異な物理的性質を持っているからである。耐久性で錆びたり腐食したりせず、半永久的に存在しうる物質であること。また、展性や粘性という性質で無限に分割したり、引き伸ばしたりすることができ、鋳造も可能であること。比較的少量で大きな価値を有しているので持ち運びにも便利であることなど。しかし、金や銀だけではなくその代理物である預かり書や手形も貨幣として流通する。

　銀行券はかつて、発券銀行の窓口に持っていくと、所定の本位貨幣(金貨や銀貨)に交換してくれることを約束した「兌換銀行券」であった。民間銀行は金準備をしつつ、独自の兌換銀行券を発行していた。やがて各国で中央銀行制度が確立すると、中央銀行が銀行券の発行権を独占し、結果民間銀行は銀行券を発行することが出来なくなった。その後、金保有高に関わらず貨幣を発行できる管理通貨制度に移行すると、銀行券は本位貨幣に兌換できない「不換紙幣」になった。現在の日本銀行券も不換紙幣である。

２、人々がお金を受け取る理由

　一万円札を発行する原価は20円もかかっていない。しかし、モノとしてはわずかな価値しか体現していない不換紙幣がなぜ一万円として流通するのか。それは、貨幣の担保価値や原価から説明することはできない。一万円札の価値はあくまで社会的に決まる。日本銀行券はその枚数の多少に関わりなく法律によってその通用が保証された「法貨」である。

　不換紙幣が受領される根拠を二つの側面から考える。

　第一に、過去から続く惰性、習慣や慣習。一万円札が昨日まで一万円という価値を持つものとして通用したから、今日も明日も、そしてその先の未来も同じ一万円として通用するはずだと考えるとすれば、人々はそれを受け取る。何度も同じ行為が繰り返されるうちに、その個人の内部に固定された行動パターンは「習慣」や「ルーティン」と呼ばれ、それが広く共有されると社会化されたルーティン、すなわち「慣習」となる。昨日まで一万円札が一万円として通用し、それで一万円分のモノが買えたから、今日もそうであろうと誰もが慣習的に信じるならば、貨幣は人々に受け取られ続ける。日本銀行券は法人の借用証書にすぎませんが、国という権威により裏付けられ、法貨として通用することが法律で明文化されていることで、この慣習的行動は強化される。

　第二に、未来に関する予想がある。慣習やルールには合理的根拠がないと考え、国の権威を一切認めない人にとっても、一万円札を受け取る理由がある。自分は一万円札の価値を慣習的に信じないにせよ、それを次の人に渡すことが出来るのならば、貨幣それ自体に価値がある必要はない。つまり、次の人が貨幣を受け取ってくれると予想できるのならば、自分がまた受け取るという行為は合理的なのである。

３、お金はどうやって作られるのか

　お金には、現金通貨と預金通貨がある。

　現金通貨とは、紙幣と硬貨、つまり、日本銀行券と補助貨幣のこと。日本銀行券は日本銀行が発行。補助貨幣は政府が発行。現金通貨は紙や金属を原料として物理的に製造され、いずれも日本銀行を窓口として一般社会へと出ていく。

　預金通貨とは、通帳の上に印刷されたり、コンピュータ上に記録されたりする単なる数字にすぎない。預金通貨とは民間銀行の預金者の要求により直ちに払い戻される預金のこと。

４、信用創造の仕組み

　現金と準備預金の合計を「ハイパワードマネー」あるいは、「マネタリーベース」という。民間銀行は、一定額の現金が預金されたとき、預金準備率を保ちながら貸付を繰り返すことによって、ハイパワードマネーの何倍もの預金通貨を創り出すことが出来る。これが、民間金融機関が預金通貨を生み出す仕組みで、「信用創造」と呼ばれる。企業はこうして創造されたお金を借りて、設備投資を行い、事業で得た売り上げから元金と利子を銀行に返済する。事業がうまくいけば、企業は利益を上げることができますし、事業規模を拡張することもできる。その結果、企業だけではなく経済全体も成長する。しかし、信用創造により生み出されたお金は、いつも実物的な投資に向かうだけではない。利益が見込めるビジネスチャンス貸付資金は株や土地などの資産に投下され、株や土地を担保に借り入れられた資金がさらに株や土地につぎ込まれる。こうした投機的な取引が資産価格を釣り上げていくとバブルが発生する。

５、貨幣が「市場」を作り出す

　貨幣は金、紙幣、電子マネーへと進化するにつれて、その物質性を次第に希薄にしていくが、一万円が一万円であることに変わりはない。例え紙幣価値が変化しても一万円札が一万円という「価値の独立の担い手」であるという事実は同じ。

　一般に、市場とはモノやサービスが売買される「場所」であると考えられている。取引所とは、多数の売り手と買い手が特定の時間に特定の場所に集まって、一度に大量な取引を行うような「集中型」な市場を、さまざまな時間と場所で行われる相対取引全体は、「分散型」の市場を構成する。

　もし貨幣が無ければ売りや買いという相対取引を個別に行うことが出来ませんから、分散型の市場も成立しない。貨幣が無い自給自足や物々交換の経済には市場は存在しない。逆に言えば、貨幣は市場を作り出す媒介として機能している。

　一般に市場とは競争を通じてモノやサービス、情報などをすでに社会に存在している資源を人々へ配分する仕組みだと言われている。自由化された市場経済はますます不安定で大きな経済格差を生み出してしまう。

　もし私たちが今使用している貨幣の特性を変えることができるのならば、「貨幣が市場を作り出す」が正しいければ、「貨幣が変われば市場も変わる」ともいえる。より望ましい形の市場を生み出すように、既存の長所を残しながら、出来るだけその短所を取り除いた貨幣をデザインし、それを導入していくことが望ましい。地域通貨とは、このような新しい形式の「貨幣」である。